

乙女ゲームの悪役なんてどこかで聞いた話ですが

エル

リスの妹。

アル

リスの弟。

リス

リシェールが森で助けた  
ちよびり天然な女性。

シャナン

メイユーズ王国の王子。  
病に臥せるリシェールの  
もとに足繁く通う。

カノープス

騎士団の副団長。  
仕事熱心で真面目だが、  
人付き合いが苦手。

リシェール

乙女ゲーム世界に  
ヒロインのライバルとして  
転生した少女。だけど  
ひよんなことから  
悪役ルート回避に  
成功して……？

ゲイル

騎士団員。ミハイルの側近。  
強面だが、おらからで  
優しい性格。

シリウス

魔導省の長官。  
その正体は、天界から  
人間界にやってきたエルフ。

ミハイル

騎士団員。戦術の天才。  
俺様気質で、周囲の人間を  
よく振り回す。

ヴィサーク

リシェールの契約精霊。

登場人物  
紹介

## 1 周目 貴族の娘

はじめまして。

わたくしはリシエール・メリス。

ファンタジー系乙女ゲーム『恋するパレット』空に描く魔導の王国』の悪役です。  
なんで自覚があるかって？

それは私が、その乙女ゲームの世界へ転生したからです。

前世の私は日本で生まれ育ちました。酸いも甘いも、とまではいかないものの、色々と経験した二十五年間でした。

けれども車の運転中、飛び出してきた子供を避けるためにハンドルを切ったら、電信柱につっこんで呆気なく死亡。次に気づいた時には、生前に携帯ゲーム機でプレイしていた『恋するパレット』空に描く魔導の王国』、略して『恋バレ』の世界でリシエールとして生を受けていたのです。

『乙女ゲーム』とは、いわゆる女性向けの恋愛シミュレーションゲームの俗称ですね。プレイヤーはゲーム内の主人公を操り、好みの男性キャラクターとの恋愛成就を目指します。

恋バレの舞台は、魔力や精霊が存在するファンタジー世界。プレイヤーは主人公の通う名門のケ

ントウルム魔導学園で、攻略対象キャラと様々なイベントを通じて親しくなっていくきます。

ところが、主人公の恋のお相手となる攻略対象キャラには、それぞれ主人公のライバルとなるキャラクターがいます。

『リシエール・メリス』はそのライバルキャラの一人。主人公の恋路を邪魔する悪役なのです。

なんで、よりにもよって……

何度その言葉が脳内を駆け巡ったことでしょう。

なぜなら、リシエールはその悪役の中でも、特別つらい過去を背負っているからです。

彼女は貴族の庶子として下民街で生まれ育ち、五歳の時に流行病で母親を亡くします。その際シヨックのあまり、秘められていた魔力を放出。凶らずも歴史に名を残す精霊、『西の猛き獅子』ヴィサークを呼び出し、その影響で下民街を壊滅状態にしてしまうのです。

そのあと、リシエールの莫大な魔力に目をつけた父親のメリス侯爵に引き取られるのですが、当然周囲の目は厳しいのなんの。

義母には冷たくされ、異母兄弟には無視される日々。使用人にさえない者のように扱われます。それだけならまだしも、とにかく力が強すぎて自分の魔力を制御することもできないのです。おかげで特に病気にからずとも、その強すぎる魔力に体が耐え切れず、何日も熱を出して寝込んでしまうことも。

心細い毎日ですが、そこに優しい母親はもういません。

泣いて泣いて泣き尽くし、やがてリシエールは世界のすべてを憎むようになるのです。

さらにはそれから十年後。ケントウルム魔導学園に通う彼女を悲劇が襲います。

リシエールと同じ魔導学園に入学した主人公は、魔導石という魔力を凝縮したアイテムの研究に励みつつ、見目麗しい攻略対象達といくつものイベントを経て愛情や友情を深めていきます。

そんな主人公のことを、リシエールの初恋の人が好きになってしまうのです。

彼は、リシエールが孤独で寂しさを抱えていた五歳の頃から、優しくしてくれる唯一の人でした。自分と似たような出自でありながら養父に恵まれ、初恋の人に愛される主人公に嫉妬し、悪の道につき進んで死亡ENDをむかえてしまうリシエール……

……ふう、そろそろ堅苦しい話し方はやめようかな。

思うんだけどさ、主人公さえいなければ、リシエールはそこまで悪いやつにならなかったんじゃない？

あー、やだよ嫉妬なんて。疲れるだけだよ、チート主人公と自分を比べるとか。

前世で私は、女ばかりで人間関係ぐちゃぐちゃの職場に勤めていた。そんな私としては、もう嫉妬はするだけ無駄！ 他人のことは気にしないのが一番！ という意見を推したい。

そう簡単にいかないのも、わかっているんだけどね。

ちなみに私が前世の記憶を取り戻したのは、お母さんが亡くなって魔力を放出してしまった時。すんでのところで思い出して、本当によかった。

あわてて力の放出を制御したので、なんとか下民街には大きな被害を出さずに済んだ。

とはいえ私の魔力は強大らしく、それに反応した精霊ヴィサークが私のもとに召喚されてしまっていたのだけだ。

そして現在、実の父親に引き取られて一月の私はといえば、熱に艶うなされベッドに横たわり中。西の猛たけき獅子ヴィサークことヴィサ君は、獅子というだけあって元のサイズだと部屋に入りきらないほど大きい。なので子猫サイズになって、ほっぺをぺるぺるしてくれている。

初雪を思わせる柔らかな毛並みと、湖のように青く澄すんだ目。キャットフードのCMにだって出られそうなくらい上品な容貌ようぼうだ。

あーかわいい、すごくかわいい。でも舌がざらざらして熱くて、熱がある人間には正直逆効果だよ、ヴィサ君。そんなところも好きだけどね。

ひたすら熱に耐えていると、こんこんと扉がノックされた。一拍置いて、メイドと背の高い男が、だだっ広く殺風景な私の部屋に入ってくる。

彼の名はシリウス・イグ。

ゲームに出てくる攻略対象キャラで、リシエールの初恋の相手である。

彼は今、背が高いだけで普通の青年に見える。でも、それは彼が魔導を使っているから。彼の本当の姿はとつても美人さん。男でも、美人は美人だ。ちなみに魔導とは魔力を使う技術のことね。

ゲームで攻略対象キャラが抱だく主人公への好意レベル——いわゆる好感度。これは、主人公の行動や発言によって変化し、数値化される。好感度を上げていけば、イベントが発生したり、ゆくゆ

くは恋人になれたりするのである。シリウスを攻略するルートでは、彼の主人公に対する好感度が三十パーセントを超えたりシエールが登場し、彼を取り合うライバルイベントが発生する。

つまり、主人公がシリウスの好感度を上げなければイベントは起きず、リシエールは名前しか出てこない。そんな哀あはれなキャラこそ、私、リシエール・メリスだ。

ゲームではリシエールの伯父おじだと名乗るシリウスだが、その正体は不老不死のエルフ。本当は伯父じゃないことを、ゲームをプレイしていた私は知っている。しかも彼は、この国の魔力に関わるすべてを取り仕切る魔導省のお偉いさんである。

さて、メイドは少しでも私との接触を避さけるように、あわてて部屋を出ていった。

お客様のシリウスにお茶の一つも出さないなんて、信じられない。

ちゃんとお客様はもてなせよ、接客失格！ と、大学時代に居酒屋バイトで培つちかわれたサービス精神が叫ぶけれど、幼い体は溢れ出る魔力でそれどころではない。

この世界の人間はみんな、魔力を持って生まれてくる。けれど、強い魔力への耐性があるのは、貴族と王家の血筋の者だけだ。魔力の強い者と弱い者の間に生まれた子供は、その魔力に体が耐えられない。よって、多くが第二次成徴期を前に命を落としてしまうのだ。そういう訳で、一般的に貴族は貴族同士でしか結婚しないし、子どもも作らない。

私が庶子しよしだというのは……うん、レアケースなのだ。

私は強大な魔力の放出でたまたま精霊を呼び出した。だから父親は私が生き延びれば利用価値があるだろうと目をつけた。でもこの家での扱いを見れば、メリス家の人間はいつ死ぬかわからない

私に肩入れしてもしょうがないと思っただけ、嫌というほどわかってしまう。

シリウスはそんな中でただ一人、私を気にかけて様子を見てきてくれる相手だ。

本当の血縁でもないのに、どうして頻繁に私を見舞ってくれるのだろう。ゲームでは明らかになつていなかったから、私はその理由を知らない。

尋ねることもできたけれど、私はそれをしなかった。母を亡くした私を支えてくれているのは、シリウスだ。もしも余計なことを尋ねて彼の気分を害したらと思うと、怖くて何も聞けなかった。

彼は私の額に手を置き、体からしゅるりと魔力を抜いてくれる。そのおかげで、暴れていた強大な魔力が私の体でも耐えられる量まで減り、呼吸が楽になった。

涙でにじんだ目を瞬かせて見上げれば、いつも無表情な彼が不器用に微笑んでいた。

「調子はどうだ、リル」

彼はなぜか、出会った頃から私のことをリルと呼ぶ。

この世界で私を愛称で呼ぶのは、彼だけ。

シリウスは私に寄り添うヴィサ君を右手で制し、左手に持ったハンカチで私の頬を拭いながら、

甘く低い声で言った。

何度聞いてもいい声だ。

ゲームでは、とある大御所声優が彼の声を担当していた。

ゲーム世界が現実になった今も、彼の声はなんとその声なのだ。

こんなに優しくされたら……好きになって当然だろうが！ リシエールは悪くない！

ゲーム内のリシエールに激しく同情しながら、私はこくりとうなずいた。

「シ……シリウス……伯父様……ありがとうございます……」

私に優しくしないで、でもありがとうございます！

彼に恋して嫉妬にとらわれ、やがてライバルキャラに成り下がる——悪役落ちなんてしたくない

私は、心の中で彼を拒む気持ちを抱きつつ、なんとかそう言った。

喉はがらがらで、まともな声が出ないほど掠れている。

ヴィサ君が心配そうにくうーんと鳴いた。

ずっと気になってただけど、その鳴き声……お前は獅子でも猫でもなく、犬なのか。それとも

見た目からしてシーサーか。

「無理にしゃべらずともよい。飲みなさい」

シリウスが枕元に用意されていた吸い飲みに呪文をつぶやく。吸い飲みに液体が満たされ、シリ

ウスは手ずから口まで運んでくれた。

誘われるようにそれに吸いつくと、スポーツドリンクみたいなのほどよい冷たさの飲み物が喉に流

れこんできた。

夢中で液体を飲み、私は再びお礼を言うためにシリウスを見上げる。

しかし彼が私の目の上に手をかざして何らかの呪文を唱えた途端、私の意識は遠くなり、それは

叶わなかった。

部屋の主が眠ってしまうと、シリウスは右手で不機嫌そうなヴィサークをいなしながら、小さくため息をこぼした。

「潮時かもしれないな……………いつそ攫うか」

不穏なつぶやきを落としたシリウスを、ヴィサークがフーフーと威嚇する。シリウスはそんな精霊などそっこのけで、眠るリシエールの顔を見ていた。

\* ❖ \*

今日も今日とて、私はベッドの中で。

でも昨日シリウス伯父様が魔力を抜いてくれたので、比較的体調がいい。

開け放した窓から、キラキラと光の魔法粒子が降り注いでいるのが見える。

そこに薄水色をした風の魔法粒子が混じり、とても綺麗だ。

魔法粒子というのは、簡単にいうと魔力の粒のこと。魔力には色々な属性があり、それにとってもった色を帯びている。ゲームでは重要なシーンでのみ見ることが出来るものだったので、実は詳しいことはよくわからない。ただ、いくら魔力があってもこれが見えない場合もあるのだとか。見えないと、魔導を使うことができないらしい。

魔法粒子を集めて、目的のために魔力を導くこと——それがこの国の『魔導』の基本だ。懐かしいな。ゲームでは画面にタッチペンでそれぞれの属性に則したペンタクルという図案を描

くと、主人公が魔導を使うことができた。

主人公の持つ、魔導石精製の道具はパレットの形をしている。ゲームのタイトルもこの道具を意識して『恋するパレット〜空に描く魔導の王国〜』。

他の乙女ゲームとちよつと違うのは、主人公の魔力属性パラメーターを上げなければならないところ。各攻略対象の持つ属性を上げることで、好感度も上がる仕組みになっている。

発売前に公式サイトを見た時は、タイトルのダサさに「これはないわな」とパソコン画面の前で呆れた。今ではいい思い出だ。

舞台設定もベタベタで、中世ヨーロッパ風の石畳の街並みや実用性そっこのけの萌え重視の衣装。さらに、メラニンに一体何が起こったとつっこみたくなる華やかな髪と目の色。それもこの国ではごく普通のことだ。むしろ日本では一般的な黒髪に、地味な灰色の目をした私のような人は少なく、貴族ではほぼ見られない。

というか、悪役だから黒という安直なキャラデザに、イラストレーターの手抜きを感じる。

私だって、ゲーム世界に転生するならいつそシルバーとか、日本人じゃありえないような髪色がよかった！ この容姿に生まれて五年が経ち、もうすっかり諦めはついているけれど。

それに、庶民として生きるならこのぐらい地味なほうが都合だ。私は主人公を引き立てて没落していく悪役にはなりたくないで、もう少し成長したら王都を離れるつもり。

私を厄介者扱いしている義母達はそのほうが喜ぶだろうし、私もこんな場所にはいたくない。碌

に顔を合わせたことのない父親には、未練などない。

子供がどうやって一人で生きていくんだ？ と、世の中の大人には考えが甘いと言われるだろうけれど、私だって五歳まで治安最悪の下民街で生きてきた。しかも前世の二十五年分の記憶まである。やってできないことはない、はずだ。

それに、どうにもならないと嘆くより、どうにかしようと意気込むほうが建設的でいい。

ま、肝心の体調がよくならなければ、ゲームがはじまる十年後を前に、私はこの世界から退場になりかねないけどね。

どうして私がそこまでしてリシエールの運命から逃れたいかということ、それにはゲームのある特殊な事情が大きく関係している。

恋バレは、主人公が魔導学園に入学したところからはじまる。

主人公はなぜか精霊に嫌われていて、魔法粒子を上手く集めることができない。そのせいで魔導の成績はイマイチ、というマイナスのステイタスから物語はスタートする。あ、ちなみにその謎はゲーム終盤に解き明かされるのだが。

それはさておき、主人公は魔導石を生成する魔導技師として、類稀なる才能を持っている。主人公の養父は魔導石を作る魔導技師のギルド長で、彼のおかげで主人公は恵まれた生活を送っていた。魔導石というのは、魔法粒子が高密度で含まれている魔石を加工して作るアイテムのこと。これを使うと、魔力が弱い人でも魔導を使うことができる優れたものなのである。主人公の持つパレットは、魔導石を生成する際に使う魔導技師専用の道具だ。

ゲームで魔導石を作る時に、どんな魔力を込めるか。それは魔導を使う時と同様、ゲーム画面上にタッチペンで描いたペンタクルによって決定されていた。

よみがえった前世の記憶には、ゲームを進めるために覚えたペンタクルがぼつちり残っている。ゲームのプレイ内容も、攻略したルートはほとんど覚えていてるようだ。興味のないことはちっとも頭に入ってこないくせに、ゲームの知識は克明に覚えているなんて、自分で自分に呆れてしまう。とにかく、恋バレはそういったファンタジー要素が受けて、ファン層が厚い人気ゲームだった。

しかしこのゲームには、実は一般のファンにはあまり知られていない、いわくがある。

もともと恋バレは無名の同人サークルが製作し、じわじわと人気が出たゲームだ。しかしその頃は、プレイヤーが選ぶ主人公の行動によってストーリー展開が変わるだけの、単純なノベルゲームだったと聞いている。私はゲームがメジャーになってからのファンなので、同人版を実際にプレイしたことはない。すでに販売が終了していたし、中古でもプレミア価格となっていて、やりたくてもできなかったというのが実情だ。

なので攻略ブログや情報提供サイトから得た知識にすぎないのだが、初期の恋バレはどうも、一部プレイヤーから『ヤンデレ矯正ゲーム』と呼ばれていたらしい。

初期の恋バレでは、まずファンタジー世界のイケメンと付き合う。そして、やがてヤンデレ化する彼らの手綱を締め、いかに問題を起ささせずに学園を卒業できるかを楽しむという、乙女ゲームの王道をちよつと……いやかなりハズしたところに主軸が置かれたゲームだったようだ。

しかもエンディングの中には残酷なものも多かつたらしく、『絶対に商業化できないゲーム』と



して名を馳せていたらしい。

それが、ファンタジーアドベンチャーというカテゴリで大人気ゲーム機に移植されたのだから驚きだ。

さて、実際にゲーム世界に転生してしまった今、この点について無関心ではいられない。なぜなら、ここが同人版の世界であるのか、それとも私がプレイしたほうの世界であるのか、現時点では判断がつかないからだ。

もしここが初期のゲーム世界だった場合、攻略対象達は必ずヤンデレ化してしまうことになる。攻略対象には、この国の王太子や宰相、將軍に魔導省を司るエルフまでいるというのに。

聞いた話では、王太子が乱心して国を崩壊させたり、將軍がヒロインほしさに内乱を起こしたり、宰相が他国に寝返って戦争になったりと、国を巻きこんでの愛憎劇が繰り広げられるのだそうだ。

シリウスのルートでは、主人公のために、小さい頃からかわいがっていた姪——つまり私——を陰惨な方法で殺すシナリオまであるらしい。

まったく冗談ではない。

なぜ、他人の恋愛の巻き添えを食らって殺されにやならんのだ！

一体全体、どうしてそんなゲーム作ったんだろうか。

恐怖や怒りを感じつつ、私はできるだけ物事をいいほうに考えようとした。

とりあえず将来の不安は置いておいて、この屋敷を出たら自分に何ができるのか考えてみる。

前世では二十五年間、特出したところのない平凡な人生を送った。そんな私は、何を糧にしたら

生計を立てられるだろうか？

リシエールのチート能力といえば、ヴィサ君がいることと強大な魔力があることぐらいだ。しかし、魔力は今のところ、私の体調を悪化させるだけの逆チート能力に成り下がっている。

……あれ？

魔力があるということは、もしかしてペンタクルを描けば魔導が使える、のか？

私は恐る恐る、痩せ細った小さな指を持ち上げて、覚えていたペンタクルを空中に描いてみた。

うん。何も起きない。

まあ、そう簡単にはいきませんよね。みんなが十年も二十年もかけて、学校で習得するものでもんね。

うう、誰もいないけど、できるかもって調子に乗った自分が恥ずかしい。

ヴィサ君が散歩に出かけていてよかった。見られるのは嫌だもんね。

そう思っていたのだが——

「何をしてる！」

部屋に大声が響いて私はぎよっとした。

メイドの、感情を排した静かな声に慣れていた私は、大きな音への耐性がなくなっていたらしい。声のしたほうを見ると、やけにきらきらしい格好をした金髪の子供が、窓枠から身を乗り出してこちらを見ていた。

そのぱっちりとした青緑の目には、警戒の色が宿っている。人の部屋を覗いておいて警戒する

なんて、身勝手な子供である。

一瞬、無視してやろうかとも思ったが、人との会話に飢えていたのだろう。私の口からは、自然と言葉がこぼれていた。

「あなた、だれ？」

「誰とは無礼な。礼儀も知らないのか」

男の子でも、張り上げた幼い声はきんきんして耳障りだ。それでも言葉をかけてもらえたことに、少しにやけてしまった。この家の人達は、私を徹底的に無視するから。

「何を笑っている！」

彼は怒りながら窓枠を乗り越えようと、私のベッドの脇にやってきた。

「すみません。えーっと、ごめんなさい？」

この世界に生まれたあとは敬語で話す文化圏にいなかったもので、今使っている言語の敬語表現がわからずに困る。

うおー、元社会人としては屈辱だ。

「謝意は理解したが……『ごめんなさい』とはなんだ？」

訝しむ少年に、今度は私のほうが目を見開く。

「『ごめんなさい』は……すみませんの違う言い方です。お母さんが、悪いことをしたら心を込めて『ごめんなさい』と言いなさいって、教えてくれました」

そう言うと、少し鼻につんときた。

こちらの世界の母親は、病弱な私を女手一つで育ててくれた、優しくて剛毅な女性だ。

一緒に過ごした時間こそ少なかったが、私は彼女のことが大好きだった。

「ナターシャがか？」

少年の驚いた顔を見て、私は首を傾げる。

私の母親はそんな名前ではない。

「いいえ。私のお母さんはマリアンヌです」

「メリス卿にそんな名前の側室がいたのだろうか……」

「お母さんは、もう死にました。流行病で」

あえて感情を殺して言うと、少年のほうが気まずそうな顔をした。

「どうやら根は優しい少年らしい。」

「……………かった」

「え？」

「悪かったと言っているんだ！ 余計なことを思い出させた」

「いいえ、あなたとお母さんの話ができて嬉しかったです。もう、お母さんのことは誰とも話しちゃいけないって、言われているから」

沈黙が二人の間に横たわる。

言ってから失敗したなと思った。こんな小さな子供に、責任を感じさせてしまった自分が情けない。

少年は、その幼さに似合わない気難しげな顔をしたあと、名案が浮かんだとでもいうようにこちらを見た。

「じゃあ、交換条件だ。私はお前に貴族らしい話し方を教えてやるから、お前は私に母親のことを話せ！」

「……は？」

一瞬、何を言っているのか理解できずに、私は首を傾げた。

「それでは、私ばかり嬉しい状況になってしまいます。交換条件にはなりません」  
そう言うと、白くてまろい頬を少年がぷっくりと膨らませる。

「いいのだ！ 人に教えることで自分の復習にもなるし、私は常々じいやに『人の話はよく聞くように』と言われてる！」

ん？ それはそれで、何か違うかいかな？

私は思わず声をあげて笑ってしまった。

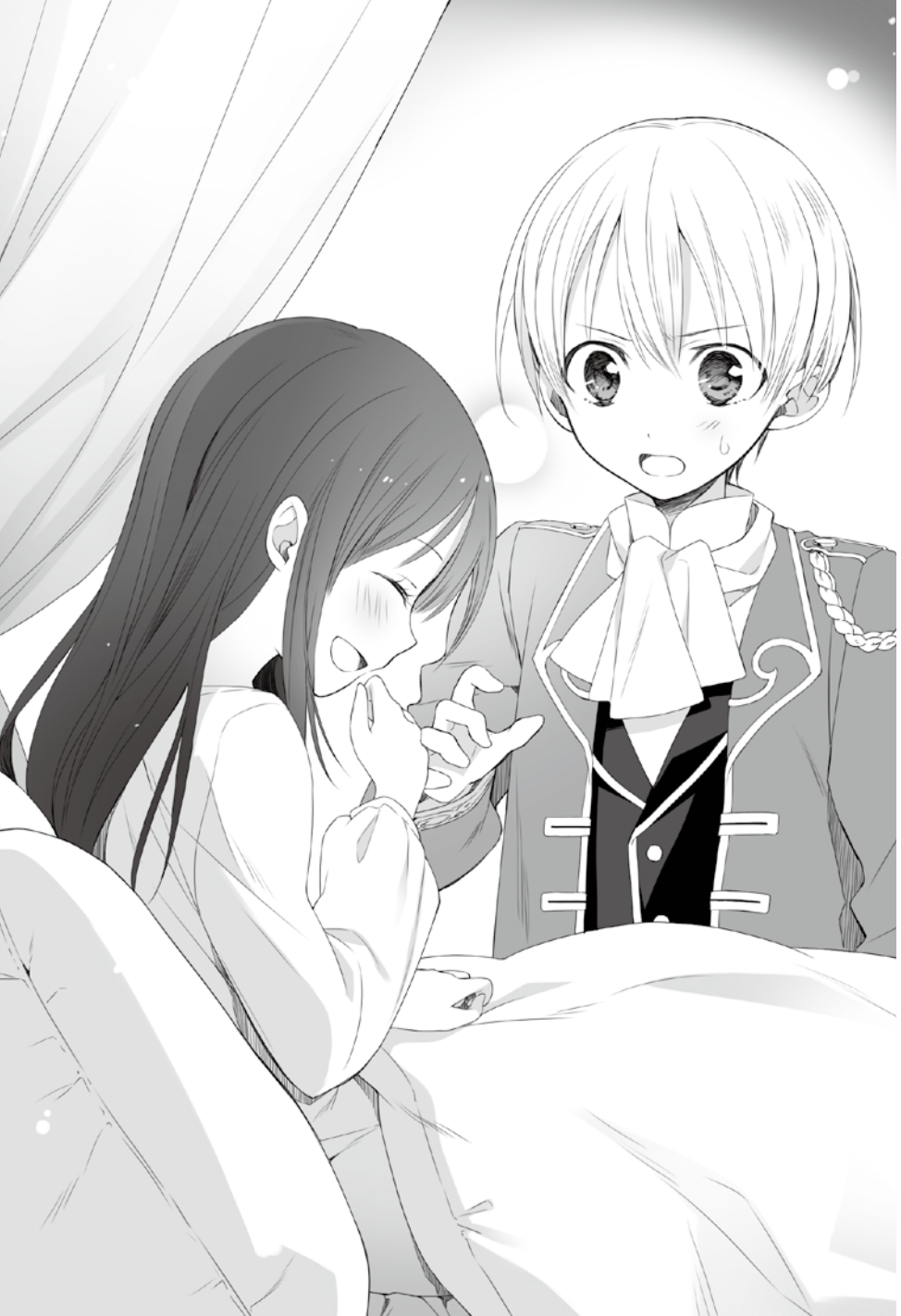
突然笑い出した私に、少年は目を白黒させている。

言葉を交わしたこの少しの時間で、私はこの不器用ながらも優しい少年に親しみを覚えた。

また話せたら嬉しいけれど、今日ほど体調のいい日はそうそうない。きっとそれが叶う日は来ないだろう。

だけど、そう言ってくれた少年の優しさだけで、私の孤独は癒された。

「名前、教えてください。私はリシエール」



「私はシャナンだ。シャナン・デイゴール・メイユーズ。特別にシャナンと呼ぶことを許すぞ」  
はあ？

私は今度こそ、驚きで言葉を失った。

いくら学がない私だって、この国の名前が『メイユーズ』だということぐらい知っている。  
そして『シャナン』は王太子の名前であることも。

さらに、よみがえった記憶によると、『シャナン・デイゴール・メイユーズ』は、ゲームのパツケージに一番大きく描かれていた攻略対象だった。

私がプレイしたルートでは、リシェールが王子と接触するエピソードはなかったのに、なぜ出会ってしまったんだろう。

私はゲームのシナリオには関わらずに、悪役ルートから外れて生きていきたいと切望している。  
なのに、どうして……

びっくりやら悲しいやらで黙りこむと、私が喜ぶと思っていたらしいシャナンは怒りだした。

私は作り笑いでそれをかわし、どうにか穏便に彼と距離を置かなければと、強い疲労感を覚えながら考えた。

\* ❖ \*

それから王子は、暇を見つけては私の部屋の窓辺に立つようになった。

彼の気配を感じると、ヴィサ君はすつと消えてしまう。どうも騒がしいのが嫌いらしい。

体調は日によってまちまちだが、なぜか王子と会うようになってから少し調子がいい気がする。

私の話を聞くと言った割に自分の話ばかりする彼のが、嫌いじゃなかった。

王子の目線で語られる王宮は、とても美しく楽しい場所だ。

本当はそれだけではないことをゲーム経験者の私は知っているが、王子は決して誰かの悪口を言ったり、愚痴をこぼしたりしなかった。

まだ七歳と幼くても、彼には確かな矜持があるのだろう。

王子に教えてもらって、私の敬語はだいぶ上達した。

でも私が王子に対してそれを遣うと、彼は嫌な顔をする。

なんなんだ、一体。

代わりと言ってはなんだけれど、王子は私の遣う下民街の言葉を少し覚えた。

悪ぶってそれを遣ってみる王子は、精神年齢二十五歳の私からすればかわいすぎてきゅんきゅんする。

自分がどれほど人との会話に飢えていたのか、王子と出会って初めて気がついた。

王子の話すくだらない話には声をあげて笑い、時には手を叩いた。

そんな私を、王子はとても満足そうに見ていた。

穏やかな時間が流れる。

まるで夢のように。

ここが乙女ゲームの世界で、自分が実父に嫌われた子供で、いつか妬みに支配され悪役になる運命だなんて、とても思えなかった。

彼が帰ってしまうと、がらんとした部屋で、私はいつも現実に引き戻される。

そのたびにもう彼に会ってはいけないと思いつても、でももう少しだけと惜しくなる。

王子はゲームの攻略対象キャラだから、いつか主人公が現れたら彼女を好きになってしまうかもしれない。シリウスのように。

対する私は、ゲームのシナリオでは王子と関わりたくない。

そう考えるたび、私の心は沈みこむ。

仲良くなつてはいけない。好きだと思つてはいけない。

乙女ゲームの悪役なんて、本当につまらない役回りだ。

\* ❖ \*

夢を見ている。

何度も見たことのある夢だ。

夢の中で、私は誰かに呼ばれている。

その誰かのいる場所は遠い。

強く引き合い、そして突き放される。

辿りつきたい。なのに出会いたくない。

相反する意識が交差する。

充滿する魔力と、混乱して乱舞する粒子。

静謐な光と、遙かなる世界のざわめき。

混濁した意識の中で、私は強い願いを抱く。

『……もう二度と、××になんてなりたくない』

強く願っているはずなのに、いつもその願いを思い出せない。

歯痒い想いと倦怠感で、自らも魔力の渦に呑みこまれそうになる。

いつそ、その渦に呑みこまれれば楽なのか。

すべてを大いなる力に委ねてしまおうと、自分という存在を捨てようとして――

けれど。

毎回その瞬間に、目が覚めてしまう。

そして目が覚めるといつも泣いている。

現実を引き戻された安心感と、結局また辿りつくことのできなかつた虚無感で、私はがらんどろになる。

そして私は、その願いを忘れてしまう。  
大切なことなのに……

\* ❖ \*

「おい！」

涙でにじむ視界に、きんきらと光を纏う髪の毛が飛びこんできた。  
幼さの残る顔が厳しい表情を浮かべている。

それが誰なのか、一瞬思い出せなかった。  
そして自分が、誰なのか……

「しっかりしろ！」

両肩を掴まれ、びくりと体が震える。ベッドに横たわる私の上にいたのは、王子だった。  
どくどくという心臓の音と、荒い息。キーンという耳鳴りが頭に響く。

私の体調は最悪のようだ。

強大な魔力が体内でうねっている。久々の強い発作だ。苦しさに耐え切れなくて、私は呻いた。  
身を振って王子の手を振りほどこうとするが、強い力でそれを阻止される。

王子が押しつけてきた掌は、莫大な魔力を吸い出していく。

私の魔力を吸いこんでいる王子は、とても苦しそうだ。

はっとした。

こんなことをしちゃ、だめだ！

「殿下！ やめてください！ 無事では済みません！」

「うるさい！ 病人は黙ってる！」

黙る訳にはいかない。

彼が私に施しているのは、他人の魔力に干渉する魔導。

彼は両手を私の肩に押し当てて自分の魔力をこちらに流しこみ、暴走する魔力の流れを無理やり  
制御しようとしている。

私より二つ、三つ年上なだけの王子にできる術ではない。

ゲームの中で、この術に失敗して廃人になった人もいるとモブキャラが話していた。  
それがどれほど危険か、魔導を習っていない私にだってわかる。

もしも王子がそうなってしまったらと思えば、私はぞっとした。

「やめてください！ 私にそんな価値なんてない！ 殿下に何かあったら、私は……」

『私は』、なんだというのだろう。

王子に何かあったら私が責められる——などと、浅ましい考えが脳裏をよぎる。  
必死に自分を救おうとしてくれてる人を前に、私は何を考えているのだろうか。  
そんな自分の醜さが嫌になる。

「私は……」

——何より、私は王子に傷ついてほしくない。

そうだ。彼が王子であるから、ということ以上に、廃人となってもう二度と笑ってくれなくなるなんて、考えたくもなかった。

自分が死ぬのは嫌だが、彼に身代わりになってほしいと願うほど、私は堕ちてはいない。しかし、彼を止めようとする私に喝が飛ぶ。

「価値なんて関係あるか！ 苦しむ者を助けるのは、人として当然だろう……むしろ、民を助けるのは王族の役目ではないのか!？」

「そんな……」

あまりにも真摯な王子の目に、私は言葉を失う。

彼はなんて清廉なのだろう。

もし前世でゲーム画面越しにこの光景を見ていたら、「若造が」とせせら笑ったかもしれない。でも実際に自分に向けられた眼差しは、胸に迫るものがあった。

将来王となった時には、その責任を投げ打って一国民の命を優先するなんて許されない。そう思いついながらも、否応なく私の胸は熱くなる。

母が死んで、私は今、誰からも必要とされていない。

それがずっと悲しかった。

内心では強がりながらも、いつも居場所をほしがっていた自分はなんて浅ましかったのだろう。急速に心が引き寄せられていく。

この人に王になってほしい。

そんな想いがこみあげてきた。

彼には人を導くために一番重要な、君主の資質が備わっている！

どれほど時間が経ったのか。

王子は大きく息を吐いて、私の肩から手を離れた。

あれほどつらかったというのに、体が軽い。

私の体内で暴れていた魔力は、今はその奥底で大人しくしているようだ。

冷えた頬の上を、私の目からこぼれた熱い涙が伝っていく。

「殿下……」

「シヤナンと呼べと……言っただろう……」

荒々しい呼吸を繰り返しながら、王子は困ったように笑った。

ああ、シリウスといい、王子といい、どうして私に優しくしてくれる人は攻略対象なのだろう。

ゲームの主要キャラになんて、絶対関わりたくない。慕っても、将来つらい目に遭うのは目に見えている。

いつか、邪険にされるかもしれないのに……

「シヤナン様。私、あなたのお役に立ちたいです」

気づくと、そんな言葉が唇からこぼれ落ちていた。

それを聞いて、王子は呆れたような、けれどもとても嬉しそうな顔をした。  
「つまらないことは考えるな。今は休め」

そう言っただけ私の頭を撫でる小さな手は、燃えるように熱い。

「殿下！ 手が熱いです。すぐにお医者様を」

「いい……誰にも、何も言うな。俺は帰るから……」

汗だくになっていた王子は、言葉に反してベッドから崩れ落ちた。

私は大きすぎるベッドから飛び下り、彼の頭を自分の膝にのせる。

「王子！ しっかりしてください。王子！ やだ……」

「ちよっと……眠いだけだ……心配ないから……」

「でも……！」

その時、普段はメイド達しか使わない扉が勢いよく開かれた。

「何を騒いでいるの、下民の子が忌々しい。自分の立場がわかっているのですか！」

甲高い声をあげたのは、私の義母でメリス侯爵夫人のナターシャだった。

ひどく苛立たしげに部屋に入ってきた彼女だが、私達二人の姿を見て目の色を変える。

「シャナン殿下！ どうなさいました！ なぜここに……」

王子の傍らに膝をつき狼狽したかと思えば、ぎらりと私のことをにらむ。

「あなた、殿下に何をしましたのです！ 貴族の風上にも置けない。これだから下民を家に入れるのなんて嫌だったのよ！」

「申し訳ありません。いくらでも謝りますし、ご不快なら姿を消しますから、早く王子を……」

涙ながらに言う私に、義母は嫌悪感を顕わにした。

「言われなくてもそうするわ。メリダ、医師を呼びなさい。殿下を貴賓室へ運んで」

付き添っていた侍女に言いつけ、彼女はすくと立ち上がる。

少し痩せすぎているが、ナターシャは年齢を感じさせず、きびきびと立っていて美しい。でも目は

いつも吊り上がっていて、何かにつけて下民を見下す血統主義なところが苦手だ。

私の母親とはまったく違うタイプで、ナターシャに初めて会った時、侯爵がどうして私の母に手

をつけたのかちよっとわかった気がした。

侍女に抱きかかえられて、王子が連れていかれてしまう。

私は、見ていることしかできない自分の無力さに打ちのめされた。

義母は激しい怒りを抑えきれないというように、絨毯に膝をつく私を蹴りあげる。

腹部に衝撃を受けて、軽い体がおもしろいほど吹き飛ばされた。

「殿下を害するなんて、王の臣たる貴族には決して許されぬことよ。どういふつもりなの！」

「ごほ……もうしわけ……ありません、お母さま……」

「母などと呼ばないで。不愉快だわ。今からあなたは、我が家にまったく関係のない人間よ。名前

も何もかも捨てなさい」

「……え？」

朦朧とする意識の中で、私は赤いドレスを着た美しい女を見上げた。

朦朧とする意識の中で、私は赤いドレスを着た美しい女を見上げた。



彼女はその容姿とは裏腹に、醜悪な魔女のように見える。

魔女はにやりと微笑んだ。

「殿下を害する人間なんて、我がメリス家には初めからいなかった。殿下は我が家の庭で体調を崩していたところを、私が偶然保護したのよ。夫には、あなたが死んだと伝えましょう。死にかけのあなたなど、手を下すまでもないわ。出ていきなさい。そして二度と戻らないで。メリスという姓も、リシエールという名前も捨てなさい。あなたはもうただの、汚らしい下民げみんなのよ」

そう吐き捨てて、彼女は部屋を出ていった。

義母に申しつけられたのか、メイドが一人部屋に入ってくる。

私に近づくメイドをぼやけた視界で見つめながら、何より王子が無事であればいいと願った。

## 2 周目 迷子

夢うつつの状態で馬車に乗せられ、いつの間にか捨てられていたらしい。

気づくと私は森の中にいた。

鬱蒼うっそうとしてはいるが、密林というほどではない。木々の間からはオレンジ色の陽が差していた。感覚が戻ってきた私の肌に、草がちくちくと刺さる。

ご丁寧なことに、私は平民が着る麻のような服に着替えさせられていた。下民として生まれた私からすれば、麻でも充分上等な衣ウラモなのだけでも。

どれぐらい眠っていたのだろうか。全身が重い。

顔にあたたかさを感じて目をやると、いつからそこにいたのか、ヴィサ君が私の頬を舐めていた。ヴィサ君。気持ちはありがたいんだけど、涎たらねだらけになるからやめてくれ。

体を起こした私は、腹部に痛みを感じて呻く。

それにしても、わざわざ森まで捨てに来るとは。

近くには荷物も何もない。よって、食べ物も水もお金もない。五歳児をこんな場所に放置するなんて、向こうは私を始末するつもりだったんだな。

どうやら今は夕方らしく、草木の生い茂る森は少しずつ暗さを増していく。

アウトドアはからきしな私だって、森には夜行性の獣が多く、昼より夜のほうが危険なことぐらい知っている。

「五歳でいきなりゲームオーバーか」

自分を鼓舞するためにちよつと茶化して言ってみたが、背中を嫌な汗が伝った。王子のおかげで、魔力による不調はない。

だからといって、夜の森を攻略するノウハウがある訳でもないんだけど。

私は最後に見た苦しそうな王子を思い出し、彼のその後が気になった。

ヴィサ君を抱えながら、両手を合わせて彼の無事を祈る。

せっかく助けてくれた命ですが、もしかしたら死んでしまうかもしれません。

だけでもし無事にこの森を出ることができたら、私は王子に会いに行きます。そして絶対に恩返しをします。

そう心に決めて、私は立ち上がった。

圧倒的に不利な状況だが、あんな意地悪義母の思い通りになるのだけは嫌だった。

『そしてリシエール・メリスは何もかもを失い、森で朽ち果てましたとさ。 〵完〵』

という訳にもいかないので、気を取り直して現状と装備の確認をしておきたいと思う。

ゲームなら、リセットボタンを押して直前のセーブデータをロードすればいい。だけどこれは現

実なので、そんなことはできないのだ。

「まずは……と」

体調はすこぶる良好で、常に体に付き纏っていた怠さはない。今にも体から溢れ出そうだった強大な魔力が、私を生かす活力として正常に体を巡っているのがわかる。

とりあえず、すぐにでも行き倒れになりにかねない状態ではなかった。

光月——日本の三月——の終わりにしては、暖かい日だ。

この国にも日本のような四季がある。それは全部で九の色月と、光月、闇月、色濁月の三つの月によって構成されている。

月の順番は、灰月、白月、光月、黄月、緑月、青月、紫月、赤月、橙月、黒月、闇月、色濁月。

灰月は、日本でいう一月だ。

春が訪れはじめた光月の森は、木や光の粒子が湧き立っていた。

身に着けている麻のような質感の服には、なんの特徴もない。この世界ではまだ紡績業が発達していないらしく、生地はざらざらとしていて、ところどころにだまがある。

それでも下民街出身の私にとっては、上等な服。厚さも充分にあり、今日は寒さに苦しまずに済みそうだ。

しかし、腕の中にはヴィサ君一匹だけ。

RPGでももう少し恵まれたスタートだろうと思いながら、私はため息を吐いた。

必死に平静を保とうとするが、遠くから犬——考えたくないが、もしくは狼のような獣の遠吠

えが聞こえてきて、ここが人間のテリトリーではないことがひしひしと感じられる。

私はちらりと、精霊界・ネコ目・獅子科・イヌ属のシーサーと思われるヴィサ君を見た。

つぶらな目で見上げるヴィサ君は、危機感など欠片も感じていない様子。むしろ遊んでほしいと言わんばかりに、しつぽを振っている。

ヴィサ君は、五歳児の私が両手でやっと抱えられるくらい大きさだ。毛色は全身白で、ところどころに銀色のトラに似た模様入り。耳はライオン、しつぽはシーサーのようにふわっと丸まっている。目はネコそのもので、瞳孔が縦長の銀目だ。ちなみに銀目というのは、ブルー系の光彩のことである。

彼を見ていると、前世で飼っていたスピッツ犬を思い出して困る。

どんな危機的な状態でも、「ああかわいい」となってしまう。

「あっ、ヴィサ君が……、うーん……ないか」

一瞬、彼がなんとかしてくれるんじゃない、なんて甘い考えが浮かぶが、すぐにそれを打ち消した。

『西の猛き獅子』という御大層な異名を持つヴィサ君。

でも実は、彼がどういう存在でどんな力を持っているのかを、私は詳しく知らない。

この世界の私はまだ五歳児で、未就学児。その上真つ当な教育を受けたことがなく、下民街では魔力や精霊とはほとんど関わらずに暮らしてきた。

精霊の守護などの不可思議な力は、この世界では魔力も知識もある貴族や聖職者だけが享受できる。貧しく身分の低い者は、その恩恵に与れない。そしてゲームで描かれていた以上に、この世

界では身分の差が激しかった。

魔導についてはゲームの知識がよみがえったので概要はわかる。しかし精霊については、主人公が精霊に嫌われていたこともあり、あまり登場しなかったから、『そういうものがある』ぐらいしか知らない。

これは参った。

ファンブックや追加コンテンツを購入していれば、もしかしたらそれに関する情報があったのかもしれないが、今となってはあとの祭りである。

シリウスがお見舞いに来てくれた時、ヴィサ君の力は封じてあると言っていた気もする。でもその時の私は意識が朦朧としていたので、詳しい話を聞くことができなかった。

ゲームの中では、大型ヴィサ君がリシェールにけしかけられて、主人公に襲いかかったりするシーンもあった。そして見事に返り討ちにされていた。もともと、プレイヤーが各属性のパラメーターを規定値まで上げていないと、その場でヴィサ君に負けてゲームオーバーになる仕様ではあったんだけど。

ゲームについて考えこんでいると、私はあることに気がついた。

「あれ、もしかして私、悪役ルートから外れた……?」

義母は名前を捨てろ、もうメリス家とは何の関係もないと言っていた。そして私を死んだことにする、とも。

つまり私はもう貴族でもなんでもなく、ケントウルム魔導学園には通わずに済む。このまま国外

脱出してしまえば、物語に関わる可能性が低くなるのではないか。

あれほど嫌がっていた悪役ルートから、私はなんの努力もせずに外れることができたようだ。

まあ、身体的にも、精神的にも受けたダメージは大きかったが。

「はは……そっかあ」

嬉しいんだか悲しいんだか。

私は乾いた笑いのあとに、脱力のため息をこぼした。

悪役ルートから外れたいと願っていた。

そのはずなのに、今はちつとも嬉しくない。

一瞬でもそばにいたいと思った人が、王都にいるからだ。

——私は甘かったのかもしれない。

離れても平気だなんて、嘘だ。

シリウス伯父様にもう一度会いたいし、絶対に王子の役に立つ人間になりたい。

小さな手をぎゅっと握りしめ、私は一步を踏み出した。

この一步が、私の新しい人生。

リシエール・メリスなんて仰々しい名前は捨ててしまおう。呼ばれるならあの名前がいい。

ただの「リル」としての、第一歩だ。

——と、決意を新たに歩き出したところまではよかったが、私は道のりの険しさにすぐ青く

なった。

だって今の私の体は、五歳児なのだ。

頭が重い。コンパスも小さい。何より臥せっていたせいで、筋力も体力もない。

これで夜の森を攻略するなど、端から無理だ。

体力を温存しようと、まずは休める場所や水場、食べられそうな果物を探す。

野獣避けに、できれば火も焚きたい。

私の武器は知識のみ。それを使ってどうにかこの状況を切り抜けなければ。

森は光の魔法粒子に代わり、闇の魔法粒子が充満しはじめていた。

下民街やメリス邸にいる時には気づかなかったが、普段人のいない場所は、人のいる場所に比

べて圧倒的に魔法粒子の密度が濃厚だった。たくさん魔法粒子が舞っている光景を見ると、

酔ってしまいそうになる。

単体ならば綺麗な魔法粒子も、自然が多い場所では複雑に混ざり合って区別がつかない。

たまに吹く風には水色の粒子がついている。草木からは緑、大地からは土色、暗がりからは艶の

ない黒の粒が溢れ出る。

闇色が濃い今、とても不気味に感じられた。

ふと、見覚えのある赤い粒子が風に乗って流れてくる。

パチパチと音がしそうな、火の粉のような炎の粒子だ。

なら、そちらに炎に関連するものがあるということか。

ゲーム知識だけでは心もとないが、確か炎を使う動物は地球と一緒に人間だけだったはず。つまりこの先にいるのは、人間もしくは炎の属性を持つ何か。

私は足を止め、躊躇した。

人間だとして、夜の森に分け入るのはどういう人だろう？

私と同じように迷いこんでいるのならいい。でも、たとえば盗賊とか、密猟者とか……おおっぴらに言えないような職業の人である可能性も大だ。

それでも人ならまだいい。これがもし炎の精霊だったら……

私の下民街で培った経験からすれば、炎の属性を持つ人は概して気性が荒かったり、喧嘩っ早かったりする。もしその傾向が、精霊にも適用されるとしたら？

戦術のない私が精霊に攻撃などされたら、ひとたまりもない。

比喩でもなんでもなく、赤子の手をひねるように、簡単にやられてしまうだろう。

ごくりと唾を呑みこんで考える。

どうせこのままここにいたって、野垂れ死んでしまう。

ならば少しでも可能性のあるほうに賭けるべきだ。

私は意を決して、その粒子が流れてくる方向に歩きはじめた。

——結果。

そこにはガラの悪いお兄さん達が、たくさんたむろっていましたとき、チャンチャン。

やばい、早くも死亡フラグが立っている。

私は絶え絶えになった息をひそめながら、ヴィサ君を抱きしめて彼の動きを封じた。

気づいた時にはすでに遅し。私は彼らのキャンプに近づきすぎていた。

急いでここまで来たこともあり、私の足はがくがく震えてしばらくはまともに歩けそうにない。

とりあえず体が小さいことを生かして、はいはいで木の陰に隠れた。

木を挟んで三メートルほどの距離を取り、キャンプをこっそりうかがう。彼らは酒を呷りながら、愉快そうに話してこんでいた。

「それにしても今回は、ウマイ仕事だった。あの狸のツラ、見たかよ？」

「真つ青になってよー、キンキラの衣装で泥ん中駆けまわって逃げていったな。シマ引きにたんまり金目の物隠してやがってよ」

ガツハツハツハと、野太い笑い声があがる。

あー……これはもう間違いない。

果てしなく黒、悪い人達だ。

私は頭を抱えた。

しばらく話を聞いていると、彼らが近隣を荒らし回っている盗賊団だということがわかった。

うかつに動けなかったため、盗み聞きは不可抗力だ。

とはいえ彼らの会話から、私は様々な情報を得ることができたのでラッキーかな。

まずこの森は隣国との国境地帯に広がる森で、現在位置は主要街道から少し離れた場所だという

こと。

「どうやら義母は私を家から追い出すだけでは飽き足らず、国の端の端にまで捨てに来させたようだ。その執念には脱帽する。」

そして、近くの街道は隣国との貿易のために非常に交通量の多い通りらしい。街道にある税関を兼ねた砦は国にしっかりと管理されていて、輸入品の検査、出入国税や関税の支払いなどで時間が取られ、その上金もかかる。

そこで金にがめつい商人は、街道を迂回して近くの村に住む農民を雇う。農民に荷物を背負わせ、森を通って密入国を図るのだ。

彼らはそんな商人を襲い、金品を奪っているみたいだ。密入国をくわだてた商人達は、治安維持隊——日本でいうところの警察に訴えることもできず、泣き寝入りするしかない。

ちなみに、彼らが言っていた『シマ引き』というのは小型の荷馬車のようなもの。小さくて人間が乗ることはできないけれど、とても馬力のある『シマポニー』という動物に荷台を引かせて荷物を運ぶのだ。小回りが利いて、山道での荷運びにも対応できる素晴らしい動物だ。外見はその名の通りゼブラ柄のポニーで、ゲーム製作スタッフの遊び心が満載である。

うーんそれにしても、この状況をどうしよう？

恐ろしくて、あの場に出ていく勇氣なんてない。でもようやく人間を見つけたのに、また一人で森をさまようのだからごめん。

私は間を取って、このまま気づかれないよう待機し、明朝、移動するであろう彼らのあとについて

て人里に行くという案を立てた。

そうすれば彼らに接触しなくとも、人のいる場所に出られるはずだ。

妙案に満足していると、ガサリと大きな音がした。私がいる場所の反対側から、女の人と、彼女の腕を掴んだ男が輪の中に入ってくる。

「おいカシル！ その女どうした！」

それまで愉快そうに笑っていた男達は、驚いて叫ぶ。

なんだなんだ、私のほうが野太い叫び声に驚いたよ。

「へへ、今日の商人の後妻だよ。金目当てに村を捨てたアバズレさあ。金さえあれば、あんな豚がこんな別嬪さんを娶れるなんて、世の中不公平じゃねえか？」

そう言いながら、男は顔を歪める。

しかしそれは一瞬のことで、そのあとはずっとへらへらと笑っていた。

私はカシルという男に激しい嫌悪感を抱いた。

「ばかか！ 子供への手出しはご法度だろうが！ お頭に殺されるぞ！」

「おめえらが黙ってりゃ、バレやしねえよ。せっかく一緒に楽しもうと思っただけで連れてきたんだからよ。な？ わかるだろ？」

そう言っ、男はドンと女の人を輪の中心に押し出した。

後ろ手に縛られているのか、転びそうになりながら一歩前に出た女性が焚火に照らし出される。

若く、そして見事なおっぱいの持ち主だった。

気丈に前を向いているが、その顔がひどく強張っているのは、少し離れたところにいる私にもわかった。彼女はカシルを見て、悲しそうな顔をした。何か言っているようだが、さるぐつわをはめられているせいで、呻き声しか出ない。

彼女を見て、男達は喉を鳴らした。

酒に酔った彼らは、カシルの意見を悪くない提案だと思い直したのだろう。

私は思わず、手の中のしつぽを握りしめた。

ヴィサ君が細かい悲鳴をあげる。

私は恐れよりも、抑えようのない激しい怒りを感じていた。

思い出す。以前向けられた、からかうような嘲り。

下民街にも彼らのような男達がいた。あそこは治安も衛生状態も最悪だった。

母は決して言わなかったけれど、彼女が女手一つで私を育てるためにどんな仕事をしていたのか、

私はうすうす気づいていた。

彼らのような男達がたまに家に来て、戯れに私の手や足や腹を踏みつけていった。

ふざけて押しつかれたことだって、一度や二度じゃない。

その時の恐怖と無力感がよみがえる。

母が守ってくれたから、私は無事に生きてこられた。

前世ではリアリティのない出来事も、この世界では自分の目の前で起きるのだ。

「じゃあ、俺が最初に相手してもらおうか」

そう言っつて女の人に抱きついたカシルを見て、私の怒りは頂点に達した。

激しい憤りで、息が荒くなる。

女性は悲鳴をあげ、必死にもがいていた。

彼女を見殺しにしたら、私は二度とあの高潔な王子に胸を張って会うことができなくなるだろう。

ぎゅっと両手を握りしめ、必死に冷静になろうとする。

何か、いい方法は？

魔導が使えないんだから、魔力は当てにならない。ヴィサ君も同じだ。

都合よく助けが来るとも思えない。

——なら、自分でなんとかするしかないじゃないか！

私はヴィサ君を置き去りにして、木の陰から飛び出し走った。ヴィサ君は騒がしいのが嫌いだから、たぶんついては来ないだろう。

「おかあさーん！」

そう叫びながら、私は暴れる女性の足に抱きついた。

「お!？」

「はあ!？」

突然現れた私に、男達は呆気にとられる。

私は彼らに邪魔される前になんとかしなくてはと、畳みかけるように大声で言った。

「探したよ！ すぐ近くまで、治安維持隊の人達も来てるの！ メリダ、頑張って探したんだよ！

早く帰ろう、おかあさん！」

名前は義母の侍女から借用してみた。

私の言葉を聞いて一瞬呆けた顔をしていた女性の目に、ゆるやかに理解の色が浮かんだ。

彼女は男の手からすり抜け、しゃがみこんで私に体を寄せてくる。すると、ふんわりといい匂いがした。

彼女はどうかやら賢い女性のようにだ。

「なんだこのガキイ！ どつから来やがった」

「おい！ それより治安維持隊が近くまで来てるってよ！ 急いで場所を移すぞ！」

「火を消せ！ 物音はなるべく立てるなよ！」

あたりは混乱し、リーダー格何人かのどすのきいた声が響いた。

炎は消され、男達があわただしく出立の準備をする音だけが聞こえる。

女性はあわてて逃げようとしたが、私は彼女の肩に手を置いてそれを押しとどめた。ほぼ輪の中心にいる今、不自由な状態で下手に動くよりも、闇の中で息をひそめているほうがいい。

男達はパニック状態だし、運がよければ私達を放って逃げるだろう。

心臓が飛び出しそうなほどの緊張を感じながら、私は女性に抱きついてあたりの魔法粒子の流れを観察した。

この世界の人は、それぞれが持つ属性の魔法粒子を体に纏まとっていて、その量は魔力の強さに比例する。

どうかやら彼らは魔力が弱いらしく、体に纏まとっている魔法粒子は少ない。みんな、各々の粒子をかすかに闇の中に散らしていた。

私は音を立てないように女性をしゃがませたまま誘導し、どの粒子からも一定の距離がある場所まで移動する。

「おい！ 女どガキがいねえ！」

「顔を見られた！ 口を封じろ！」

男達の言葉を聞いて、血の気が引く。

最初からこいつらは、この女の人を無事に帰す気なんてなかったんだ！

男達が闇の中に手足を突き出し、私達を探す。

もうすぐ彼らの目が闇に慣れてくる頃だ。

私は深呼吸して、覚悟を決めた。

できる。できる……つーかやらなきゃ死ぬんだっつーの！

しゃがみこんで、土に指で触れる。

メリス家で空中にペンタクルを描いた時、魔導は使えなかった。実は、あれからずっと考えていた。

あの時ダメだったのは、もしかしたらその形をちゃんと可視状態にしなかったからかもしれない、と。

私は、指先に集まる魔法粒子をイメージする。



そして、その流れが一つの凶形になるように導いた。

土の上に指を滑らせてできた溝に粒子を流しこみ、簡単なペンタクルを描く。

すると浮遊していた闇の魔法粒子が、私と女性の周りに集まってくる。

これは主人公がゲーム初期に習得するペンタクルで、『隠身』という効果を持つ。

このペンタクルを使うと、その場に一番多い魔法粒子で体が覆われる。一時的に、使用者と使用者が触れている物体や生物の姿を、周囲から見えなくすることができるのだ。さらに接触すらできなくなる、優れものである。

リシエールは校内かくれんぼ大会で、『隠身』を使った主人公に煮え湯を飲まされていたっけなあ。

ちなみに由緒正しい学校の行事に、なぜかくれんぼ大会があったのかは激しく謎だ。

何かこじつけ的な伝承があった気もするが、すっかり忘れてしまった。

そうして私達が身を固くしていると、やがてリーダー格の男が押し殺した声で怒鳴り、男達は諦めて逃げていった。

彼らの足音が充分遠くなってから、私は土に描いたペンタクルを手で消す。

すると私達の周りに集まっていた闇の魔法粒子がさっと散った。あたりには普通の闇が戻ってくる。

すすり泣く声が近くで聞こえた。

私は震え続ける女性に安心してもらうため、ポンポンとその肩を叩く。

私はひどい疲労を感じた。きつと初めて魔導を使ったせいだろう。それでも女性を縛っていた縄とさるぐつわをなんとか解き、そのまま倒れるように眠りについた。

何度も言うが、私は五歳児だ。

睡眠時間がいっぱいほしいお年頃である。

\* ❖ \*

あたたかい。

頬に触れるものは柔らかくて、いい匂いがある。

炎の爆ぜる音と、夜の虫の音が聞こえる。

肌に触れる、人の温もり。

自分ではない、誰かの心臓の音が心地いい。

夜風がさらりと、頬を撫でた。

「おかあ……さ……」

覚醒し、ゆつくりと瞼を開ける。

そこには、安堵したような女性の顔があった。

「よかった。気がついたのね」

憔悴の色をにじませながら、それでも彼女は気丈に微笑む。

寝起きの私は、その女性が望んでいた相手ではないことに、一瞬の絶望を味わった。

「あなた、は？」

あたりを見渡すと、相変わらず森の中だった。私は、彼女の膝を借りて横になつていたらしい。

「私はリスよ。リス・カールストン。危ないところを助けてくれて、本当にありがとう」

その言葉で、私は眠る前の出来事をどうにか思い出す。

火の近くで改めて見ると、やはり見事なおっぱいをしている。

「リスさん、私はどれくらい寝ていましたか？」

私はそう言って、彼女の膝枕から頭を上げる。彼女は訝しむような顔をした。

しかしその表情は一瞬で消え、次に心配の色が広がる。

「三メニラほどよ。治安維持隊にわかりやすいように火を焚いて待っていたのだけれど、誰も来ないの」

三メニラ……つまり、一時間半か。メニラとは時間の単位で、一メニラはおおよそ三十分。地球の時計のように分、時間と単位が変わることはなく、二十四時間は四十八メニラ、十五分は半メニラとなる。ちなみに五分は小メニラだ。

それはともかく、後半の言葉に私は冷や汗をかいた。嘘だとは言いつらく、言葉を濁す。

「あ……それは……」

しかしその態度で察してくれたらしく、リスは困ったように笑った。

「やっぱり嘘だったのね。タイミングがよすぎると思った。治安維持隊がいなのは残念だけれど、

あなたには感謝しなきゃね。助けてくれて、本当にありがとう」

「え？」

「私のために、飛び出して嘘までついでくれたんでしょう？ 小さいのに、あなたはすごい勇氣の持ち主だわ」

労わるように頭を撫でられ、私は思わず俯いてしまった。

そんな立派なものじゃない。

ただ許せなかっただけだ。女を戯れで傷つける男達が。

あんな作戦とも言えない作戦、本当はやるべきじゃなかった。

もし失敗していたら、命を落とす危険だつてあったのだ。

私は彼女を見て言う。

「いいえ、私のせいで危険な目に遭わせてしまつてごめんなさい。私は迷子で、あなたを家に連れていくことができないの」

子供の姿で落ちこんだ素振りなんてすれば、彼女はそんなことはないと思つてくれるだろう。

そう言われるのが嫌で、私は沈んだ様子を見せないよう、しっかりと顔を上げた。

炎に照らされた彼女の瞳は、新緑みたいに鮮やかな黄緑色だ。

長く伸ばされた髪は赤茶色で、ゆるやかなウェーブを描きながら背中に落ちていく。

素直じゃない私に、リスは苦笑いをこぼした。

「大丈夫よ。このあたりの森は庭のようなものなの。明るければ、私一人だつてちゃんと帰れるわ。

朝になったら一緒に森を抜けましょ。このあたりはまだ森が深くないから、凶悪な獣はいないの」  
安心させるように、彼女は再び私の頭を撫でる。

その感触がなんだかひどく懐かしくて、私は再び彼女の膝に頭を預けた。眠ってもいいという彼女に甘えて、私はうたた寝を繰り返しながら朝を待つ。

その合間合間で、リズは私に身の上話をしてくれた。

この森の近くにある農村出身で、幼い頃からよく森で遊んでいたこと。

両親を亡くし、幼い弟と妹の三人で身を寄せ合い、貧しくても慎ましく幸せに暮らしていたこと。

弟は頭がよくて、どうにか王都の学校に行かせたいこと。

そんな時に街の商人から後妻にならないかと声をかけられ、喜んでその話を受けたこと。

「本当は、別の婚約者もいたんだけどね」

リズはそう言って、つらそうな顔をした。

私は言葉が見つからず、黙りこんだ。

この国では、恋愛結婚というのは非常に少ない。

王族は血統で、貴族は家柄で、商人は財力で相手が決まる。街に住む平民は比較的自由に恋愛を楽しむが、多くの国民は親や近所の元締めが決めた結婚に従う。それは、農村でも同じだ。

リズの婚約者も、そういう相手だったんだろう。

彼女は、年の離れた商人との結婚を『幸せ』だと笑った。

そんな話をしているうちに朝が来て、世界に再び光の魔法粒子が溢れはじめる。

空から降り注ぐ光の粒子は本当に綺麗だ。

私は無事、夜を越せたことにホッとした。

……それにしても、ヴィサ君は一体いつになったら出てくるんだろうか？  
いや、私が置き去りにしていったんだけどね。

\* ❖ \*

「あそこが私の生まれ育った村よ」

二人で森を抜け、しばらく歩いたところで、リズは小高い丘から指を差した。家々が点在する、平和そうな村だ。前世のテレビで観たヨーロッパの農村に少し似ている。

しかし、間違い探しのように見慣れない動物や設備があり、目を疑った。

ある囲いではダチョウサイズの鶏が飼われ、村から少し離れた大きな囲いには牛柄のアルパカがたくさん放牧されている。

なぜにアルパカ……そして牛柄……

つつこみどころ満載だが、これが普通の光景なのかリズに驚いた様子はない。

製作スタッフ、ふざけすぎである。

丘を下りると、リズは人目を避けるように大回りをして進み、村のはずれにある小さな煙突の家の戸を叩いた。